

中国語と日本語における程度副詞の対照研究 —「極」「非常」と<極めて><非常に>—

時 衛 国

1. はじめに

中国語の「極(ji)」は非常に硬いニュアンスを持つため、主に書き言葉として使われ、日常会話では用いられないが、「非常(feichang)」は硬い文章語に使われるほか、やや硬い感じはするものの、話し言葉にも用いられる(注1)。一方、日本語の<極めて>は主に公式の発言や論文・新聞などの書き言葉に用いられ、くだけた会話文にはほとんど使われないという点では中国語の「極」と大体同じである。そして<非常に>はやや文章語的であるが、話し言葉にも使われるので、文体的には中国語の「非常」とよく似ている(注2)。

四語は文体的にそれぞれ近似し、動詞・形容詞(形容動詞)などを修飾し、高い程度性を示すという点では共通している。もしある基点と極点を設定すれば、「極」<極めて>はいずれも極点に位置し、極点に達する程度を表す。それに対し、「非常」<非常に>は極点までにはいかないけれども、極点に近いところに位置する。従って、「極」と<極めて>、「非常」と<非常に>はそれぞれ同じレベルにあるペアとして、比較対照することができる。本稿は四語の意味用法について、これまでの先行研究を踏まえながら、動詞・形容詞(形容動詞)などを修飾する場合を中心に、様々な角度から把握し、その共通点と相違点を明らかにしたい。

なお、本稿では考察語に関して、その程度副詞的用法だけを取り上げ、それ以外の用法を除外する(注3)。

2. 先行研究

「極」「非常」については『現代汉语虚词例释』(1982)、『現代汉语虚词用法小词典』(1984)、『現代汉语八百词』(1984)などがある。これらの先行研究(注4)を振り返って見ると、『現代汉语虚词例释』と『現代汉语虚词用法小词典』では、「極」について前置修飾と後置修飾という二つの用法に分けたのは正しいが、両者の共起範囲及び否定形式との共起などに関しては記述されていない(注5)。また「非常」がよく形容詞・助動詞・心的態度を示す動詞及び「有」からなった抽象的動詞フレーズを修飾するとは述べたものの、それ以外の動詞を修飾できない理由などには一切触れていない。一方、『現代汉语八百词』は「極」について最高の程度を示すとしているが、実際には最高の程度を示すのが「最(最も)」「頂(一番)」であるから、「極」はあくまでも頂点に達する程度を示すことになる。「非常」(注6)に関しては、動詞・形容詞などを修飾すると述べていながら、どのタイプの語を修飾しどのタイプの語を修飾できないのか、また、対象語の否定形式とのかかわりなどに即しては説明されていない。したがって、これらの先行研究を踏まえつつ、もっと深く考察・研究する必要があると思われる。

「極めて」「非常に」については、森田氏の『基礎日本語辞典』(1989)(注7)、飛田・浅田両氏の『現代副詞用法辞典』(1994)などがある。これらをまとめてみると、『基礎日本語辞典』では<非常に>の品詞的特色・文体的性格については論じられているが、しかし、その共起範囲や被修飾語との文法的関係及び程度的意味などに関してはあまり説明されていない。<非常に>という語は日常生活の中で極めて使用頻度の高い程度副詞であるから、これについてはいろいろな角度から把握し、十分に研究する価値があるものと思われる。『現代副詞用法辞典』では、<極めて><非常に>の意味・文体及び感情色彩などについては克明に記述されているが、両語は程度副詞として動詞・形容詞の肯定形式のほか、その否定形式をも語によって修飾できるということは述べられておらず、また動作性の強い動詞を修飾できるかどうかとも言及されていない。要するに両語の意味用法については、これまでの先行研究(注8)を踏まえながら、更に深く考察しなければならないと思う。

3. 比較考察

3. 1. 動詞修飾の場合

3. 1. 1. そのままで共起できる動詞

- (1) 他{非常(極)} 重視自己的人格价值, 以至有些时候使人难以理解。(彼は自分の人格価値を非常に(極めて) 重視し、人には納得できない場合がある)(『人民文学』1993. 4. P93)
- (2) 米側からは国防総省担当者のほかに、国防総省、国家安全保障会議のメンバーも参加する予定で、核問題を米側が極めて(非常に) 重視していることを示している。(『読売新聞』1992. 2. 6)
- (3)*随着利用者の増加, 纠纷和不满也在{极/非常} 增加。(「その利用者の増加と共に、トラブルやクレームも増加している」の意)(注9)
- (4) その利用者の増加と共に、トラブルやクレームも非常に(?極めて) 増加している。(『読売新聞』1992. 3. 17)
- (5) 他{非常/极} 不重视自己的人格价值, 以至有些时候使人难以理解。(彼は自分の人格価値を全然大切にせず、人に納得できない場合がある)
- (6)*米側からは国防総省担当者のほかに、国防総省、国家安全保障会議のメンバーも参加しない予定で、核問題を米側が{極めて/非常に} 重視していないことを示している。

中国語の「極」「非常」は「重視」の肯定形式と否定形式を修飾し、「増加」と共起できないという点では共通しているが、硬いニュアンスを含んでおり、文章語に多用され、日常会話にほとんど使われないという点では、「極」は「非常」と大いに違っている。「極」は「重視」を修飾するにあたって、その重視する様子が頂点に達することを表す。「極重視自己的人格价值」はその人のプライドが極めて高く、自分の人格価値を最大限に重視することを強調しているが、「極不重视自己的人格价值」は自分の人格価値を全く無視し、廻りの人に尊敬されなくても平気であることを暗示している。「極」はまた「极其」「极为」などの

形で用いられることが多い。「极其」「极为」は、それぞれ「極＋其／為」からできたものであり、「其／為」と共起することによって「極」のニュアンスは更に強調されることになる。したがって、「极其重視」「极为重視」は「极重視」より語気がずっと硬く、丁寧な表現に使う場合はあるものの、くだけた場面には用いられないという点では共通している。「极为」は「极其」よりもニュアンスが硬く、文章語的感じが強い。そして両語は肯定形式の極度を主に強調し、構造上のせいから、「*极其不重視(「重視しない」の意)」「*极为不重視(「重視しない」の意)」のように「重視」の否定形式を修飾できないという点では全く同じである。ところが、「极其」「极为」と「非常」はいずれも「増加」を修飾することができない。「増加」は表面に動きが現れない動詞ではあるものの、「少しずつ増えている」ことを示すから、その意味には変動しつつあるものが隠然と内包されており、心的態度を示す「重視」などとは大いに性格の違うものと見られる。「極」「非常」は静的捉え方しかできず、変化や移行などの意味を含んだ語とは相容れないから、共起できない(注10)。「非常」は文章語としてやや硬い感じはするが、日常会話にも使うことができる。そして「重視」の肯定・否定両形を共に修飾できるという点では「極」と同じであるが、表す程度性は「極」より低く、主に普通の様子と全然違うという意味合いを強調している。だから、「非常重视」は重視する姿勢が普通の対応をはるかに越えているが、但しその程度性は未だ頂点には達していないことを示す。「重視」のように肯定形式と否定形式が共に「極」「非常」と共起できる動詞はまた、「注意(注意する)」「讲究(重んずる)」「賛成(賛成する)」「尊敬(尊敬する)」「尊重(尊重する)」「理解(理解する)」「支持(支持する)」などが挙げられる。肯定形式だけが共起できる動詞は、「努力(努力する)」「感谢(感謝する)」「同情(同情する)」「拥护(擁護する)」「反对(反対する)」「轻视(軽視する)」「卖力(頑張る)」「恶化(悪化する)」などがある。一方、「増加」のように共起できない動詞はまた、「评价(評価する)」「燃烧(燃烧する)」「抑制(抑制する)」などが挙げられる。

日本語の<極めて><非常に>は「重視する」の肯定形式を修飾できるという点では、中国語の「極」「非常」と同じであるが、その否定形式と共起できないという点では、それらと違っている。<極めて>は文章語的ニュアンスが強いため、ある事柄の重要性や残念な気持ちなどを強調する場合によく用いられる。一方、<非常に>は書き言葉に多用されるほか、場合によって少し硬い感じはするものの、日常会話にも使われる。<極めて>は極端な度合を示すから、語気は<非常に>より硬いが、共起範囲は<非常に>より狭い。<非常に>は会話文にも文章語にも使えることから、使用頻度が高く、但し、それによって示される程度性は<極めて>より低いものと見られる。例文(2)では、「アメリカ側が核問題を重視している」という情報について、<極めて>はその姿勢の度合が極点に達し、この上もないほど最大限に重視しているということを端的に強調しているのに対し、<非常に>は普通の程度を大幅に越え、頂点にかなり近いところに位置しながら、未だ頂点には至らないということを示唆している。そして「重視する」の否定形式を修飾できないという点では<極めて><非常に>は共通し、中国語の程度副詞と全く異なっている。日本語では<全く><全然><少しも><殆ど>などのように専ら動詞の否定形式と共起する陳述副詞があり、これらは「*{全く／全然／少しも／殆ど} 重視す

る」などのように「重視する」の肯定形式とは共起できず、「{全く／全然／少しも／殆ど}重視していない」などのようにその否定形式と共起できるから、専ら否定の程度性を示すことになる(注11)。<極めて><非常に>は、それらと共起範囲や文法的役割などが異なり、動詞の肯定形式だけと共起し、肯定の程度を限定するものと思われる。「重視する」のように<極めて><非常に>によって修飾され得る動詞はまた、「注目する」「悪化する」「限定する」「安定する」「抑制する」「抑える」「進む」「混乱する」「混迷する」「憂慮する」「錯綜する」「進歩する」「遅れる」「汚れ切る」「硬直化する」(注12)などが挙げられる。

<非常に>は例文(4)において「増加する」と共起し、その増加ぶりが普通の程度を越えていることを強調しているが、<極めて>はその程度的意味が強いせい、このような場合には「増加する」と共起すると、少し不自然な感じを生んでしまう。「増加する」は少しずつ増えているという意味合いを含有しており、通常状態性の強い修飾語によって修飾され、それをもって「どのように増加しているのか」、その状況や状態などを具体的に示すことになる。従って、このような場合には、「ますます」「段々」などの副詞は、修飾語として用いられることが多い。<極めて>はただ極端な程度性を示すだけであり、「増加する」に必要な状態的意味を持たないため、そのまま共起すると、表現としては落ち着かない。もし、<極めて>という修飾語と「増加する」という被修飾語との間に、「その利用者の増加と共にトラブルやクレームも極めて頻繁に増加している」のように、「頻繁に」という状態的修飾語が付いた場合には、<極めて>は「頻繁に」に関わって共に「増加する」を限定するので、自然な表現となる。この場合において、<非常に>は、異常な増加ぶりをそのままで示し、他の修飾語を介しなくても共起できるという点では<極めて>と違っている。また、「増える」「燃える」「燃焼する」「炎上する」「評価する」などの動詞を修飾する場合には、

(7) 「今日は付き合いを失礼して釣りに行きます」という人が非常に(??極めて) 増えている。(『読売新聞』朝刊1991. 11. 21)

(8) この石炭が非常に(??極めて) 燃えている。

などのように、<非常に>はそのまま共起できるのに対し、<極めて>はそのままでは共起しにくいと思われる。このタイプの動詞は状態性の強い修飾語と共起しやすく、<極めて>のような極度的修飾を直接受容する意味的側面がないため、そのままでは共起できない。ところが、<非常に>はそれ自体に状態的意味がすでに含まれているから、このタイプの動詞の程度性と状態性を一括して修飾できるというわけである。又、「驚く」「がっかりする」「びっくりする」「悩む」「苦悩する」「困る」「感動する」「疲れる」(注13)など心境や感情・感覚などを示す動詞は<非常に>と共起できるが、<極めて>とは共起しにくい。例えば、

(9) (法案は)この二つの柱を前提に、非常に(??極めて) 苦悩しながら作ったから、若干わかりにくい面があったかもしれない。(『読売新聞』1991. 12. 23朝刊)

(10) 「十五日だ。今お前のアパートに行ってきた、お父さんはお前の無謀さに、非常に(??極めて) 驚いているところだ。あんなバカなことをして——」(曾野綾子著『二十一歳の父』P51・新潮社)

<非常に>は話者の主観的表現に用いられるから、「苦悩する」「驚く」を修飾することができる。それに対し、<極めて>はあくまでも客観的表現に馴染み、話者が直接体験した感情・感覚的なものを把握できないため、この類の動詞と共起することができない。<極めて>は主観の極度表現に使えず、話者の感情・感覚への捉え方ができないという点では<非常に>と大きく違っている。また中国語では、「**极**／**非常** 惊讶(非常にびっくりする)」「**极**／**非常** 苦恼(非常に苦悩する)」などのように、日本語の「驚く」「苦悩する」に対応すると見られる「惊讶」「苦恼」はいずれも「**极**」「**非常**」と共起できることから、<極めて>はそれらとも異なっている。

3. 1. 2. そのままで共起できない動詞

- (11)*我们要**极**／**非常** 采取措施。(「我々は措置を取るべきである」の意)
- (12) 我们要**极**／**非常** 慎重地采取措施。(我々は**極めて**／**非常に**) 慎重に措置を取るべきである)
- (13)*我々は**極めて**／**非常に**) 措置を取るべきである。
- (14) 我々は**極めて**／**非常に**) 慎重に措置を取るべきである。
- (15)*这是个**极**／**非常** 住的城市。(「これは住む都市である」の意)
- (16) 这是个**极**／**非常** 容易住的城市。(これは**極めて**／**非常に**住みやすい都市である)
- (17)*東京は**極めて**／**非常に**) 住む都市として、地域社会の数々の問題を露呈させている。
- (18) 東京は**極めて**(**非常に**) 住みにくい都市として、地域社会の数々の問題を露呈させている。(『読売新聞』1991. 11. 19夕刊)
- (19) 这是个**极**／**非常** 不容易住的城市。(これは**極めて**／**非常に**) 住みにくい都市である)
- (20)*東京は**極めて**／**非常に**) 住みにくくない。

中国語の「**极**」「**非常**」と日本語の<極めて><非常に>は、そのままで「**采取**／**取る**」「**住**／**住む**」と共起できないという点では共通している。このタイプの動詞は主に行為・動作や事柄・状況などを示し、「**做**／**する**」「**干**／**やる**」「**制造**／**製造する**」などのように動きが表面に現れるものが多いから、著しい動的性格を持っているように思われる。その意味には程度副詞によって修飾される程度性というべきものが含まれていないため、直接には両語の程度副詞と共起できないというわけである。

中国語の「**极**」「**非常**」は、例文(12)において、まず形容詞の「**慎重**」と共起し、それ全体で「**采取**」を限定することになる。この場合では、「**极**」「**非常**」は「**慎重**」の程度性を修飾しているから、動詞の「**采取**」には間接に関わっているに過ぎない。一方、「**住**」は「**住居する**」という意味を示し、その意味範疇によって時間の長さや量を示す語句と共起することになり、程度的修飾語とはそのままでは共起できないが、「**容易**」「**好**」「**难**」など助動詞的な語句と共起して、「**容易住**(住みやすい)」「**好住**(住みやすい)」「**难住**(住みにくい)」のように形容詞的なフレーズを作った場合には、その程度性が認められるので、「**极**」「**非常**」と

共起できるようになる。例文(16)は、その都市の住みやすさの程度が極めて高いことを強調している。「容易住」「好住」は「{極/非常} 容易住({極めて/非常に} 住みにくい)」「{極/非常} 不好住({極めて/非常に} 住みにくい)」などのように、その否定形式でも共起できるが、「难住」はマイナス表現であるため、「*{極/非常} 不难住(「住みにくくない」の意)」のように否定形式は共起できない。「极其」は「极其容易住(極めて住みやすい)」「极其好住(極めて住みやすい)」「极其难住(極めて住みやすい)」のようにやや硬い感じはするが、いずれもそれらと共起できる。但し、「*极其不容易住/不好住(「住みにくい/住みづらい」の意)」のようにその否定形式とは共起できない。「极为」は「极为难住」のようにマイナス表現の「难住」とは共起しやすいが、「??极为容易住(「住みやすい」の意)」「??极为好住(「住みやすい」の意)」のように「容易住」「好住」と共起した場合には、かなりの不自然さが感じられてしまい、また「*极为不容易住(「住みにくい」の意)」「*极为不好住(住みにくい)の意)」のように、その否定形式とは共起しにくいものと思われる。

日本語の<極めて><非常に>は、程度性のない動詞を(13)(17)のように修飾することができない。「取る」「住む」は通常「事故再発防止のため、迅速に措置を取るべきである」「この辺にはもう長く住んでいる」などのように、状態や数量などを示す語句によって修飾されることが多く、極点や異常な程度性を示す語句とはあまり共起しない。ところが、「この問題について{少し/十分} 措置を取るべきである」「この辺にはもう{相当/かなり} 住んでいる」などのように、<少し><十分><相当><かなり>などとは共起し、微小・甚大な量的さや長い時間量を示す語句によって修飾されることになる。<極めて><非常に>は、それらと共起範囲や意味用法などが異なるものと見られる。併し、「取る」「住む」は「取りやすい/住みやすい」「取りにくい/住みにくい」のように、「一やすい」「一にくい」「一難い」「一づらい」などの接尾語(注14)と結び付いて、一つの状態性の強い複合語を構成した際、それなりに程度性が生まれてくるので、<極めて><非常に>と共起しやすくなる。(18)においては、「住みにくい」は形容詞的な意味を含んでおり、「住む」は、「一にくい」との共起によって動詞らしさが少なくなるが、その代わりに形容詞相当の添加的複合語としてその文法的機能が大きく変わり、その状態的意味が強化されることになる。この中で、東京の住みにくさの程度性を<極めて><非常に>は、それぞれ違った程度的クラスをもって区分している。しかし、「住みやすい」「住みにくい」の否定形式を「*{極めて/非常に} 住みやすくない」「*{極めて/非常に} 住みにくくない」のようにいずれも修飾できないという点では、<極めて><非常に>は中国語の「極」「非常」と異なっている。

- (21) 这个方法{極/非常} 解决问题。(この方法はちゃんと問題を解決できる)
- (22) *この方法は{極めて/非常に} 問題を解決する。
- (23) *经济体制的改革{極/非常} 伴随着困难。(「経済体制の改革は困難を伴う」の意)
- (24) 一気に市場経済を導入することは、各国のレベルも違い、非常に(?極めて) 困難を伴う。(『読売新聞』1992. 4. 15朝刊)
- (25) *这种做法{極/非常} 产生。(「こんなやり方は~を生む」の意)
- (26) *这种做法{極/非常} 产生误解。(「こんなやり方は誤解を生む」の意)

- (27) 这种做法(极/非常) 容易产生误解。(こんなやり方は(極めて/非常に) 誤解を生みやすい)
- (28)*例えば建設の仕事なら誤解はないが、PKOについては(極めて/非常に) 生む。
- (29)*例えば建設の仕事なら誤解はないが、PKOについては(極めて/非常に) 誤解を生む。
- (30) 例えば建設の仕事なら誤解はないが、PKOについては非常に(極めて) 誤解を生みやすい。(『読売新聞』1992.4.8朝刊)

中国語では、「解決」は単独には程度性が含まれていないため、「*这个办法(极/非常) 解决」のように「极」「非常」と共起できないが、「解决问题」のように目的語を取った場合には、一つのまとまりのあるフレーズとして、それなりの程度性が生まれることになり、それ全体は「极」「非常」によって修飾されることができる。(21)のように肯定形式だけでなく、その否定形式にも程度性が含まれているから、「这个办法(极/非常) 不解决问题(この方法は問題解決に全然効かない)」のように、「极」「非常」はその構造の否定形式をも修飾できる。「解决」のように目的語を取れば「极」「非常」と共起できる動詞はまた、「遵守(纪律){規律を守る}」「有(才能){才能がある}」「守(规矩){規則を守る}」「受(欢迎){歓迎を受ける}」「合乎(逻辑){道理に適う}」「符合(要求){要求に適う}」などがある。一方、「伴随(着)」はそのままではもとより、「困难」と共起して、「伴随着困难」のようにフレーズを構成してでも、それ全体には程度性が想定できないから、「极」「非常」はその構造全体を修飾限定できないわけである。

日本語では「問題を解決する」と「解決する」とは、ただ目的語を取るか取らないかの問題であり、どちらも程度性が含まれていないと見られ、直接には<極めて><非常に>と共起できないという点では共通している。一方、「伴う」はそのままではまとまった意味を示すことができないため、<非常に>とは共起できない。併し、「困難を伴う」のように目的語を取って、一つの連語を作った場合には、まとまりのある意味合いを示し、その構造全体は程度的修飾を受け入れる属性を有しているため、<非常に>と共起できるのである。が、<極めて>と共起した際、やや不自然な感じを受けるのは、その構造が極度の修飾を排斥しているからなのであろう。「伴う」のように目的語や補語を取って<非常に>と共起できる動詞は又、「(生彩に)富んでいる」「(希望・影響を)与える」「(不快感を)示す」「(理に)適う」「(人心を)得る」「(ショックを)受ける」「(～の利益に)合致する」などがある。

「产生/生む」は「产生误解/誤解を生む」のように目的語をとっても、(26)(29)のように「极/極めて」「非常/非常に」と共起することができない。何故なら、「产生误解/誤解を生む」はマイナス表現として好ましくない事柄を示し、ただ「ある行為による誤解を生む」という行為の帰結を強調するが、その意味全体は行為的側面が著しく暗示され、程度性が想定しにくいいため、程度的修飾を受容しないからである。そして(27)(30)のようにフレーズ全体は更に「容易/—やすい」と結び付いて、「容易产生误解/誤解を生みやすい」のように、形容詞に近い状態的意味を含有した複合語になった場合、はじめて「极/極め

て「非常／非常に」に修飾されることができる。この場合には、「容易／やすい」との共起により、程度副詞に必要な状態性・程度性を獲得しているため、その目的語である「誤解／誤解」が主格に使われても、「这样的誤解(極／非常) 容易产生／こんな誤解は(極めて／非常に) 生みやすい」のように成り立つ。この点では中国語と日本語は全く同じである。また「*这样的誤解(極・非常) 不容易产生／*こんな誤解は(極めて／非常に) 生みやすくない」などのように、このタイプの複合語の否定形式を修飾できないという点でも両語は共通している。

3. 2. 形容詞修飾の場合(注15)

- (31) 一天下午, 天气极(非常) 好。(ある日の午後、極めて(非常に) 良い天気であった)(『人民文学』1993. 9P116)
- (32) 尊厳死について患者の意志をはっきりと認めた今日の報告は非常に(極めて) いい。(『読売新聞』1992. 1. 25夕刊)
- (33) 这次实验结果(極／非常) 不好。(今回の実験の結果は(極めて／非常に) 良くなかった)
- (34) 関西経済連合会会長の川上哲郎委員は「委員会で規制緩和の話は十分出しているし、賛成する人も多い。だが、実際に各省庁と掛け合っていると、結果は極めて(非常に) 良くない」と嘆く。(『朝日新聞』1995. 6. 19朝刊)
- (35) 同事们一个接一个地差不多都走了, 办公室里非常(極) 安静, 只有我一个人。(同僚達が次々に帰り、事務室には私一人しかいなくなり、非常に(極めて) 静かだった)(『人民文学』1993. 8P68)
- (36) 東京証券取引所の立会場は極めて(非常に) 静かだった。(『読売新聞』1992. 4. 3夕刊)
- (37) 办公室里人很多, (非常／極) 不安静。(事務室には沢山の人がいて、なかなか静まらなかった)
- (38) *東京証券取引所の立会場は(極めて／非常に) 静かではなかった。
- (39) 这次旅行收获(極／非常) 大。(今回の旅行は(極めて／非常に) 収穫があった)
- (40) 戦後の日本が平和を維持できたのは、日米安保条約によるところが極めて(非常に) 大きい。(『読売新聞』1992. 2. 17朝刊)
- (41) *这次旅行收获(極／非常) 不大。(「今回の旅行はたいした収穫がなかった」の意)
- (42) *今回の地震では被害は(極めて／非常に) 大きくなかった。

中国語の「極」「非常」は示す程度性こそ異なれ、「好」「安静」の肯定形式と否定形式を共に修飾し、「大」の肯定形式しか修飾できないという点では共通している。「極」は書き言葉ではごく普通に用いられ、状態・性質や事柄・情況などの極度を示している(注16)。それに対し、「非常」はあまり文体的束縛に縛られず、極度に近い様子や程度的意味を強調するという点では「極」と大きく違っている。「好」「安静」を修飾する際には、「極」「非常」はその肯定の程度と否定の程度を共に限定することができるが、「大」を修飾する際にはその肯定の程度だけを限定し、その否定形式とは共起できない。「好」「安静」はプラス形

容詞であり、好ましい事柄を示すことが多く、その肯定形式には状態性と程度性が含まれているから、共起範囲はかなり広く、程度副詞などと結び付きやすいという性格がある。一方、その否定形式は肯定形式に対する否定的意味を表し、マイナス表現に多用されるが、肯定形式と同じ状態性と程度性が含まれており、程度副詞によって修飾されることが可能である。従って、「不好」「不安静」はいずれも「極」「非常」と共起できるわけである。ところが、「大」は中性的形容詞として場合によってプラス表現にもマイナス表現にも用いられ、その肯定形式は共起範囲が広いので、程度副詞と共起できるというものの、その否定形式は程度的意味が極めて弱く、ある状態・性質などに対する打消しの意味を強調するところに視野があり、極度や程度の大きさを示す副詞によって修飾される意味的側面が狭いゆえに、その肯定形式とは違う共起範囲を持っているものと思われる。よって、「不大」は「極」「非常」によって修飾限定されることができない(注17)。「好」「安静」のように肯定形式と否定形式が共に共起できる形容詞はまた、「穏(穏やかだ)」「頼(宜しくない)」「順利(順調だ)」「认真(真剣だ)」「自然(自然だ)」「高兴(嬉しい)」「合理(合理的だ)」「安全(安全だ)」「平静(平静だ)」「舒服(気持ちがいい)」「平整(平らだ)」「干净(きれいだ)」などがあり、プラスの意味を示す語が圧倒的に多い。それに対し、「大」のように肯定形式しか共起できない形容詞はまた、「坏(悪い)」「差(悪い)」「高(高い)」「低(低い)」「长(長い)」「短(短い)」「深(深い)」「浅(浅い)」「恶劣(悪質だ)」「消极(消極的だ)」「卑鄙(卑怯だ)」「嚣张(横柄だ)」「严重(嚴重だ)」「顽固(頑固だ)」「保守(保守的だ)」「愚蠢(愚かだ)」「伟大(偉大だ)」「崇高(崇高だ)」「远大(遠大だ)」などがある。中性的・マイナス意味を示す語が多いが、それ自体に甚だしい程度性を含んだプラスの語の一部も、このグループに入る。

「極」「非常」はいずれも「大」と共起できるとはいえ、音節の違いや文脈によって共起しにくい場合がある。例えば、

- (43) "卖点技术如何?"当侯铁军幽默地提出这一点子时, 立即引起厂部领导班子成员
的极(*非常)大兴趣。(「技術を少しでも売却したらどう?」と侯鉄軍さんがユ
ーモアな口調でこのように提案した際、すぐ工場指導部のメンバーたちが大い
に興味をそそられたのであった)(『人民文学』1993. 12・P146)

では、「極」は一音節語なので、被修飾語「大」を修飾してそれ全体で「兴趣」に関わり、一つのまとまった意味を示し、「极大兴趣」という切れ目のないフレーズを構成するが、「非常」は二音節語のせいか、そのフレーズには馴染まない。「非常大兴趣」となると、「非常大」という修飾語は「兴趣」という被修飾語との間に切れ目があり、両者は結び付きが悪いから、共起できない。この場合は連体修飾的關係を示す「的(助詞「の」に相当)」の助けを借りれば、「立即引起厂部领导班子成员的正常(极)大兴趣」のように「非常」は共起できるようになる。併し、「非常」がこのように用いられた場合は「的」が多いせいか、話し言葉的感じが強い。

「極」の派生語と思われる「极其」「极为」は、「{极其/极为} 安静(極めて静かだ)」「*{极其/极为} 好(極めて良いの意)」などのように、二音節語とは共起しやすく、一音節語とは音節的バランスが取れないため、共起できない。また、二音節語とはいうものの、その肯定形式だけを修飾でき、「*{极其/极为} 不安静(「静かではない」の意)」「*{极其/

极为) 不舒服(「気持ちが悪くないの意)」のようにその否定形式を限定することができない。「极其」は「極」より語気が硬く、日常的に使用頻度の高い二音節語と書面語的に多用される二音節語を修飾することが普通であるが、「极为」は「极其」よりも書き言葉のニュアンスが強く、書面語的な二音節語と共起することが多い。例えば、「住在这里, {極/极其/极为} 方便」では、いずれも共起できるが、「极其」は「極」より、「极为」は「极其」より強いニュアンスを持っている。だから、表現のニーズや文体の硬さにより、三語は使い分けられることになる。一方、「气焰(??極/?极其/极为) 嚣张(極めて尊大に振舞う)」では、「極」は、語勢が比較的弱いし、文体的硬さが不足しているから、かなり不自然さを感じられる。「极其」は「極」より若干落ち着きがよくなるものの、不自然さが少し残る。「极为」は語勢的にも文体的にも被修飾語とバランスが取れているので、この中で一番適切な使われ方をしているものと見られる。ここから考えれば、同じく極度を示す語群内部にも微妙な語感差と程度差が存在しているものと言える。

日本語の<極めて><非常に>は「良い」の肯定形式と否定形式を共に修飾し、「大きい」の肯定形式しか修飾できないという点では、中国語の「極」「非常」と同じであるが、「静かだ」の否定形式を修飾できないという点では、それらと異なっている。「良い」はプラスの形容詞として好ましい事柄を示すのに使われ、その肯定形式は強い状態性と程度性を含有しているため、「極めて良い」「非常に良い」のようにそのままでも共起しやすいが、その否定形式はマイナス的表現になり、否定の意味が強いせい、そのままだでは「?{極めて/非常に} 良くない」のように不自然な感じを受けないわけではないが、但し、「結果は{極めて/非常に} 良くなかった」「五十メーター先に{極めて/非常に} 見通しの良くないカーブがある」のようにほかの語句と共起した場合には、一つのまとまりのあるフレーズとして明確な意味を示すから、いずれも<極めて><非常に>によって修飾されることができるのである。「良い」のように肯定形式と否定形式が共に修飾され得る形容詞は、「好ましい」「宜しい」「望ましい」など数少ないプラスの語に限られる。一方、「静かだ」「大きい」は程度副詞と共起しやすい状態的内容を持つ形容動詞と形容詞であり、その肯定形式だけが程度的修飾を受け入れ、否定形式はある状態・性質への否定的意味が強いし、程度副詞の修飾を排斥しているものと見られる。従って、<極めて><非常に>は「静かだ」「大きい」の肯定形式だけを限定し、「静かではない」「大きくない」という否定形式を修飾することができない。「静かだ」のようなプラス語は他に、「安全だ」「積極的だ」「樂觀的だ」「重要だ」「謙虚だ」「健康だ」「貴重だ」(注18)などがあり、「大きい」のような中性的語は「小さい」「高い」「低い」「強い」「弱い」「長い」「短い」「軽い」「重い」などがある。また「危険だ」「遺憾だ」「残念だ」「困難だ」「深刻だ」「悪質だ」「きつい」「苦しい」といったマイナス語もこのグループに属する。

日本語では、<極めて>は、その極度的意味に相応しいと思われる硬い文体に馴染み、書き言葉の他、政府関係者や議員の記者会見時あるいは国会答弁時に多用されるのに対し、<非常に>は、日常会話にも普通に用いられるから、<極めて>より共起範囲が広い。「この内閣の誕生の仕方は非常に(極めて) 残念ですね(『読売新聞』1991. 11. 5朝刊)」「{極めて/非常に} 遺憾だ」では、<極めて><非常に>はいずれも自然な表現として共

起できる。が、＜極めて＞は「極めて残念だ」よりも「極めて遺憾だ」のほうが、特に新聞や公式の発言に多用される。なぜなら、「残念だ」は日常用語として柔らかいニュアンスをもつが、「遺憾だ」は硬い漢語であり、文章語的感じが強いからである。一方、＜非常に＞は「非常に遺憾だ」という言い方もされるが、「非常に残念だ」というのが普通である。主に書き言葉に使われるとはいえ、＜非常に＞は日常生活の中で使用頻度の高い形容詞・形容動詞と共起しやすいという性格がある。それに対し、＜極めて＞は「遺憾だ」「悪質だ」などのような典型的書面語と結び付きやすく、修飾語と被修飾語の文体的性格が一致し、それらによる意味表現は特有なニュアンスを伴っており、極めて自然な感じを与える。

- (44) 陪同她来的只有接待单位的杨子敏同志，我感到非常(极)难过：～。(招待機関の楊子敏さんが彼女のお供をして来たので、私は非常に悲しく思った)(『人民文学』1993. 4P87)
- (45) 親友と別れるのは{??極めて/非常に} 悲しい。
- (46) 这次旅行{极/非常} 快乐。(今回の旅行は非常に楽しかった)
- (47) 今回の旅行は{非常に/*極めて} 楽しかった。
- (48) 小时候，我家住在北京一座极(非常)普通的四合院里。(小さい頃、家は北京のごく普通の四棟の建物で構成された住宅に住んでいた)(『人民文学』1993. 12P123)
- (49) 今年の天候は{極めて/??非常に} 普通である。
- (50) 想到在几次交谈中，他曾说过的几句我原以为极(??非常)平常的话。(何回もの話し合いの中のごく普通だったと思う話を彼がしていたことを覚えている)(『人民文学』1993. 10P116)
- (51) こうした悪劣な行為が、長年にわたって通用したこと自体極めて(??非常に)異常だ。(『読売新聞』1992. 3. 3朝刊)

中国語の「非常」は、「难过」「快乐」「普通」をいずれも修飾できるという点では「极」と共通しているが、「平常」を修飾しにくいという点ではそれと違っている。「难过」「快乐」「普通」は、人間の感情・心持ちや状況・事情などを示す形容詞であり、その意味にはいずれも状態的内容が含まれており、形容詞(形容動詞)らしさがあるため、「极」「非常」に修飾されやすいのである。一方、「平常」はそれ自体に「常」という字があるせいか、「极」とは共起するが、「非常」とは共起しにくいものと思われる。「平常」のほかに、このタイプの形容詞にはまた「异常(異常だ)」「反常(異常だ)」「寻常(平常だ)」などがある。「平常」「寻常」は意味的には「非常」と反対であるが、形態的には同じ「常」が重なってしまうため、抵触し合っているのであろう。一方、「异常」「反常」は「非常」と形態的にも意味的にも近似しているので、「??非常异常(「極めて異常だ」の意)」「??非常反常(「極めて異常だ」の意)」のように一緒に用いられると、極めて不自然である。それに対し、「积极」「消极」などの形容詞は、「这个人非常积极/消极(この人は非常に積極的だ/消極的だ)」のように、「非常」によっては修飾され得るけれども、「极」という字が含まれているために、程度副詞の「极」とはあまり共起しない。一方、その派生語と見られる「极其」「极为」などは、「积极」とは共起しにくい、「消极」とは「这个人{极其/极为} 消极(この人は極めて消極的だ)」のよ

うに共起できる。これらの派生語は「其」「为」などの要素があるから、その原形と性格を異にし、いずれもマイナス表現に馴染み、好ましくない事柄を示すことが多いと言える。

日本語の<極めて>は、「悲しい」「楽しい」を修飾することができないという点では、<非常に>と違い、また中国語の「极」「非常」とも違っている。「悲しい」「楽しい」のような形容詞・形容動詞はまた、「愉快だ」「嬉しい」「寂しい」「苦しい」などがあり、これらはいずれも話者の感覚や感情などを表すものであって、程度が大であることを示すくとも>と共起することが普通である。とはいえ、(45)(47)のように<非常に>によって修飾されることもできる。ところが、<極めて>は客観的事柄を把握することが多く、話者の感情的・感覚的なものを修飾の対象に捉えることができないから、この類の形容詞と共起することができない。<極めて>は主に状態性の強い非感情的な内容を限定し、話者の主観的表現とは相容れられないのに対し、<非常に>は単純な状態でも話者の心理的状态でも捉えることができ、そうした状態の程度性が普通の度合をはるかに越えていることを強調している。<極めて><非常に>が共起範囲や文法的性格を異にするのは、それぞれの程度的意味によるものと見られる。日本語では感情的・感覚的状态が絶対的頂点に達し、百パーセントで存在するということは通常想定しがたいものである。<極めて>は被修飾語に対しては極度的修飾を行い、その状態や事柄などの典型的さを強調するので、その程度的意味は調和不可能な側面があり、絶対的なものである。それゆえに、主観の感情・感覚などを示す形容詞とは共起できない。が、<非常に>は被修飾語の程度性を極端に強調するのではなく、その程度性がプラスに行っていることを端的に強調するのである。したがって、このタイプの形容詞とも共起しやすいものと考えられる。

一方、「普通だ」「異常だ」は典型的に成り立つ形容動詞であり、概念化した意味合いを含んでいるから、<極めて>(19)と共起できるわけである。<極めて>は、例文(49)では、今年の天候は例年と比べれば少しも変わらない、ごく普通であるということを強調しているが、(51)では、こうした悪劣な行為が長年にわたって通用したこと自体は異例である、ということを表わしている。それに対し、<非常に>は「普通だ」「異常だ」と共起しにくい。「普通だ」のような程度の大小に関りなく、典型的にできた語句と専ら程度性がプラスにゆくことを強調する<非常に>とは、異質なものであり、互いに受け入れられない。従って、共起しにくいものと思われる。

4. まとめ

以上述べたことを整理すると、大体次のようにまとめられる。

中国語の程度副詞は被修飾語への選択が厳しく、状態性と程度性の有無を修飾可否の条件とし、それらとの共起範囲が限定され、あくまでも静的対象語しか捉えることができない。一方、状態性の強い動詞・動詞フレーズや形容詞などの肯定形式と否定形式を共に修飾限定し、肯定の程度と否定の程度を同じ副詞で表し分け、違った程度的意味をもって強調することができる。プラス・マイナス両面の程度性を修飾する意味的構造と

文法的機能を共に持ち、肯定の状態と否定の状態を限定するのが、中国語の程度副詞の性格と言える。

日本語の程度副詞は、表面に動きが現れる動詞を修飾できないが、状態性の強い動詞と共起しやすく、その共起範囲は中国語の程度副詞より広く、変化しつつある状態をも把握限定することができる。動詞・動詞フレーズや形容詞などの肯定形式をそれぞれランクの違った副詞で修飾することができるとはいえ、特定の対象語以外にその否定形式とは共起できず、否定の程度性を限定することができないため、程度表現としては釣り合いが取れていないことになる。肯定の極度と甚大な程度を強調し、肯定の状態・状況や事柄などしか捉えることができないのが、日本語の程度副詞の特色と考えられる。この点では中国語と違っている。

注

- 1、中国語では、程度副詞として「非常」に近いのは「很」である。「很」は書き言葉にも用いられるが、話し言葉に多用されるという点では、「非常」と正反対である。「非常」は日常会話に使われた場合にも、文章語的との印象を受けるのに対し、「很」は日常会話的なので、書き言葉に使われた際にもくだけた感じが強い。なお、本稿では分かりやすくするため、中国語の副詞は「」、日本語の副詞は<>で示す。以下同じ。
- 2、日本語では、<非常に>より話し言葉のニュアンスが強いものには、<とても><大変>などがあり、これらは<非常に>と違って、硬い書き言葉にはあまり使われない。また、ごくくだけた話し言葉では、<すごく>などが用いられる。
- 3、四語は、「极尽奢侈之能事(贅沢を極める)」「口を極めて誉める」「当时是非常时期(当時は非常時だった)」「非常勤講師をやっている」などのように用いられることがあるが、いずれも動詞・名詞的に用いられたものであり、程度副詞として使われたものではないので、本稿ではそれらを除外する。
- 4、先行研究にはまた姜汇川他編(1989)『现代汉语副词分类实用词典』などがあるが、考察語に関して述べたことは上述の論とほとんど変わらないので、ここでは紹介しない。なお本書では、「极」「非常」は程度を表す場合と限度を表す場合とがあるとされ、それぞれ程度副詞と限度副詞に分類されている。詳しくは同書参照。
- 5、中国語の「极」「非常」は、被修飾語の前に来てそれを修飾する用法のほか、また「热闹极了/非常(賑やかそのものだ)」などのように被修飾語の直後に使われる後置的用法があるが、今回はこの問題について述べる余裕がないので、別稿に譲ることとする。
- 6、周小兵(1992)は、現代中国語の程度副詞を「絶対程度副詞」と「相対程度副詞」とに二分類し、「非常」を絶対程度副詞の一つとして挙げているが、「极」については言及していない。詳しくは氏の論文を参照されたい。
- 7、『基礎日本語辞典』には<極めて>についての記述はない。<極めて>に関する論は極めて少なく、その史的考察については、清水教子(1975)「御堂関白記の程度副詞(極メテ)について」(『国文学考』67)などがある。詳しくは氏の論文を参照されたい。

8、森山卓郎(1985)は、現代日本語の程度副詞を「純粹程度副詞」と「量的程度副詞」とに分けている。その中で<極めて><非常に>は「純粹程度副詞」として分類されている。一方、渡辺実(1990)は程度副詞を「発見系」と「計量系」に二分類し、<極めて><非常に>を計量的構文には立つが比較的構文には立たない「発見系」における<とても類>に入れている。詳しくは両氏の論文を参照されたい。

9、出典を示さぬものは作例である。以下同じ。

10、中国語では、「稍微／略微／多少增加了一些(少し増えている)」「很吃了一些水果(果物をかなり食べた)」などのように、表面に動きが現れる動詞を専ら修飾する程度副詞がある。これらは「極」「非常」などと共起範囲が異なるものと認められる。

11、日本語では、動詞の否定形式と共起する副詞は「全く重視していない」のように全否定を示すものが多い。この点では、中国語の副詞が否定形式修飾時に全否定を示さないという程度的意味と違っている。

12、ここに挙げた動詞はいずれも実例がある。なおこの中では、「宮沢自民党政治が極めて汚れきった中で、奈良県民が政治の浄化を求めた結果だ」(『読売新聞』1992. 2. 10朝刊)などのように「た」「ている」などの形を取って使われるものが多い。そうした形をとることによって状態性がより強くなり、従って<極めて><非常に>などと共起しやすいものと思われる。

13、『基礎日本語辞典』では、「ああ、ひじょうに疲れた」などとは言わないとされているが、『使い方の分かる類語例解辞典』では、「非常に疲れた」という言い方が成立するとされている。

14、これらの接尾語は元々、形容詞から転じてきたものであり、その前に来た動詞を形容詞化する働きを持つものと思われるから、それを受けた動詞は形容詞的意味を示すことになる。

15、日本語の形容動詞もここに入れて述べることにする。なお中国語では、形容動詞というものはないが、日本語の形容動詞に相当すると思われるものは、ほとんど形容詞となっている。

16、実際には「極」の後置的用法は、「高兴极了(非常に嬉しい)」「好极了(非常に良い)」などのように日常会話に多く現われ、くだけた感じが強いという点では、その前置的用法と対照的である。ここから考えると、同一副詞とは言え、その前置的用法と後置的用法によって文体差と程度的意味がかなり異なり、複雑で多様な性格を持つものと思われる。

17、この場合では「一点也不大(少しも大きくない)」などのように全否定を示す「一点也」が「不大」と共起することになる。

18、ここに挙げた、<極めて><非常に>と共起可能な形容詞・形容動詞はいずれも実例がある。

19、<極めて>は物事の完璧さを強調する点では<ごく>に近い。「極めて(ごく)当然なことだ」「極めて(ごく)あたりまえのことだ」などのように、<極めて><ごく>は置き換えられるが、併し、<非常に>は、「*非常に当然なことだ」「*非常にあたりまえのことだ」のように使えない。

参考文献

中国語

北京大学中文系1955·1957级语言班编 1982 『现代汉语虚词例释』 商务印书馆

吕叔湘主编 1984 『现代汉语八百词』 商务印书馆

陆俭明 1980 「“程度副词+形容词+的”一类结构的语法性质」『语言教学与研究』
1980年第2期

姜汇川 许皓光 刘延新 宋凤英编 1989 『现代汉语副词分类实用词典』 对外贸易
教育出版社

曲阜师范大学编 1986 『现代汉语常用虚词词典』 浙江教育出版社

王自强编著 1984 『现代汉语虚词用法小词典』 上海辞书出版社

郑怀德 孟庆海编 1991 『形容词用法词典』 湖南出版社

周小兵 1995 「论现代汉语的程度副词」『中国语文』1995年第2期

日本語

小学館辞書編集部 1994 『使い方の分かる類語例解辞典』 小学館

時衛国 1996 「中国語と日本語における程度副詞の対照研究—程度の小ささを示すもの
を中心に(一)—」『日本語研究』16号 東京都立大学国語研究室

—— 1996 「中国語と日本語における程度副詞の対照研究—「很」とくとても>—」
『都大論究』33号 東京都立大学国語国文学会

—— 1996 「中国語と日本語における程度副詞の対照研究—「十分」「相当」とく十分
(に)><相当(に)>—」『東アジア地域研究』第三号 東アジア地域研究学会

丹保健一 1981 「程度副詞と文末表現」『金沢大学語学・文学研究』11号

飛田良文・浅田秀子 1994 『現代副詞用法辞典』 東京堂

松井栄一 1977 「近代口語文における程度副詞の消長」『松村明教授還暦記念国語学と
国語史』 明治書院

森田良行 1989 『基礎日本語辞典』 角川書店

森山卓郎 1985 「程度副詞と動詞句」『国文学会誌』20号 (京都教育大学)

渡辺実 1990 「程度副詞の体系」『上智大学国文学』23号

(shi wei guo · 東京都立大学院生)